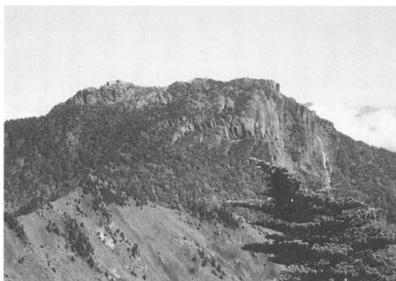
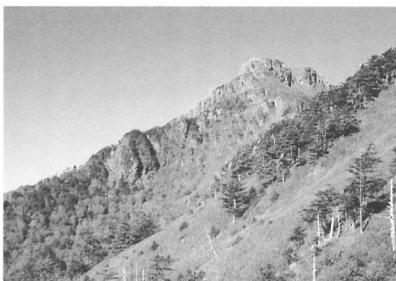




1999 夏 土小屋登山道から石鎚を望む



1999 二の森山頂から石鎚山頂を望む



1998 秋 土小屋からの登山道から石鎚山を望む

なつて数々の和歌が登場してくる。紀貫之の、「おちこちの人は富士とや見まがわん伊予の高嶺の雪の夕ぐれ」が名高い。西行法師の歌と伝えられる、「忘れては富士かと思ふこれやこの伊予の高嶺の雪の曙」があるが、おそらくこれは伝承歌で、西行本人のものかどうか確証は得難い。

西行研究家の白洲正子の考証によると、西行が四国行脚に出発したのは仁安二年（一一六七）五十歳の時。西行の旅の目的は憤死した讃岐の院（崇徳院）の御陵に詣で御霊を慰めることにあった。その後西行は普通寺周辺まで足をのばしている形跡はあるが、伊予へわたったという足跡は見当たらないようだ。普通寺から遙か石鎚を望んで詠んだものなのか、あまいさが残る。たしかに石鎚は富士とどこか似通ったイメージを喚起させ、終生、富

士に憧れぬいた西行の「こころ」がこの一首に巧みに織りこまれている。与謝野晶子夫妻が伊予路を訪ね、道後平野から石鎚を仰いで詠んだ晶子の歌「いみじかる秋にひたれり瀬戸の海、道前道後石づちの山」がある。その他、半井梧庵、川田順、伊藤房雄などの秀れた歌詠みがさまざまに観点から石鎚を捉え賛美している。西条出身の歌人で、五島美代子を伴侶に持つ石博千亦にも石鎚を詠



（写真撮影：室家俊文氏）

1999 秋 石鎚山頂神社より天狗岳を望む

石鎚は 吾が恋う山

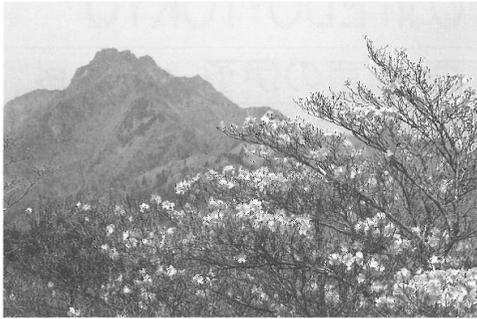
菊池 佐紀

●——特集
道前平野の歴史と文化

日本七霊山の一つとして知られる石鎚山は西条市と上浮穴郡面河村の境に位置し、古来から庶民の信仰の対象として崇められ、「おやま」と呼ばれて親しまれてきた。この西日本の最高峰、石鎚山を詠んだ秀歌は数多く伝えられており、はじめて文学に登場したのは、万葉集巻三に収録されている、山部赤人の長歌「伊予の温泉に至りて作れる歌」だという。この歌の中に、「島山の宜しき国とこしかも伊予の高嶺の射狭庭の岡に立たして歌思い」という部分がある。「石鎚山は「富士の高嶺」に擬して「伊予の高嶺」と呼ばれ、平安末期から伊予の歌枕と



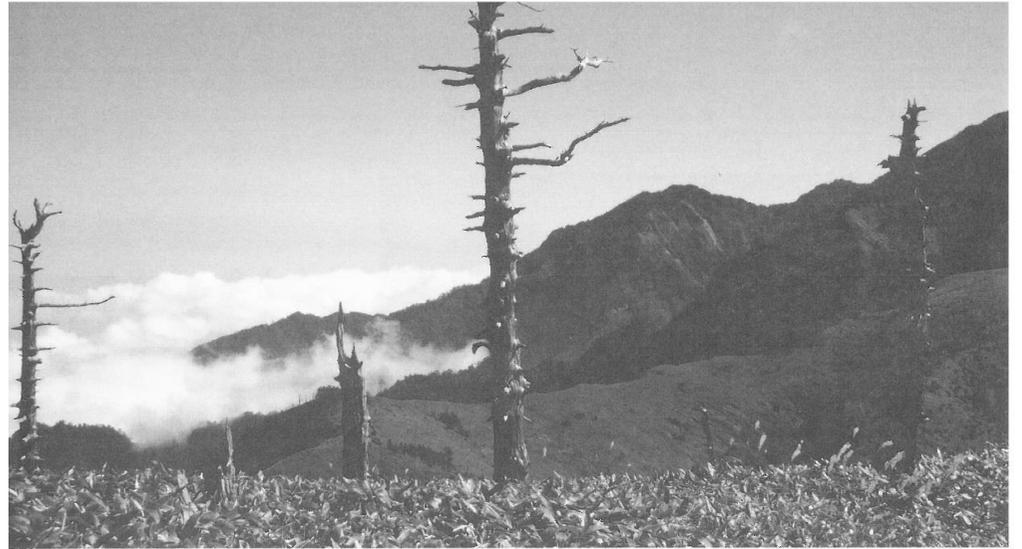
1999 秋 土小屋登山道から瓶ヶ森を望む



2000 春 岩黒山より石鎚を望む (花はアケボノツツジ)



1999 二の森の白骨林を通して石鎚山系を望む



1999 堂ヶ森付近から石鎚山を望む

鎚の神いますがための名なり」と銘記され、厳しい精神修業の場であった石鎚が時代と共に俗化の道を行くのは悲しい。現代人の自然破壊欲は聖なるものを卑俗と等価値におとしめかねないのである。

小説の世界に目を転じてみよう。石鎚を背景に生まれた文学に、因子英雄氏の「カワセミ」「鳥恋い」の秀れた二編がある。石鎚の山裾に住む小学生の兄弟が野鳥の神秘ないのちに触れて、生きものとの共生の時間を持つる欲に目覚めていく。その一途な想いが、彫琢を持った精緻な文章で語られる。

「近くの農家の向こう、真南に石鎚山が見える。駱駝の瘤みたいにかつく突き出た頂きに、まだ雪が消え残っていた。このあたりの山なみは「四国の屋根」をかたちづくっている。東端にとっしり坐った笹ヶ峰や、山頂が斧のかたちにとがった瓶ヶ森は、残雪を振り落として山谷を和らげ、石鎚の西につらなる二の森はわずかに雪をこびりつかせて、肩をそびやかしていた」「広場からは山なみ越しに石鎚がせり上って見え

きくち・さき 文芸誌「アミーゴ」主宰。県生涯学習推進講師。平成十二年十二月、松山一週会で「千利休」を講話。平成十三年二月、松山生涯学習センターで「元禄の文学者たち―西鶴と近松、芭蕉の精神」を講話。北上市在住。

んだものが多い。ふるさとの伊予の高根に向ふときおさるるがごとく頭は下る知々に無かふ厳しさして船の上ゆいしつち山の朝すがた見る

同様に、船上から石鎚を仰いで詠んだという香川冬夫の一首は石博の歌と全く個性を異にしている。

石鎚は吾が恋う山ぞ瀬戸の海の蒼きが上に茜さしたり

前者の、石鎚を神聖視する厳しい姿勢はここには見られぬが、絵画的な美しい情景が完璧に描写されていて、聖なるエロティズムさえ感じさせる。女人禁制の影響もあつてさほど石鎚を身近に感じなかつた私は、この一首に触れて以来、俄に石鎚が私の心の中に確固とした像を結ぶに至った。

名画を見るような香川冬夫の静かな石鎚と異なつて、実在の石鎚山は冬期ともなると厳しく仮借のない、肌を刺すような寒風を施にもたらす。その「石鎚おろし」にもめげず、道前平野に住む人達はこの「お山」を崇敬し、愛し、自分たちの護符として先祖代々生き抜いてきたという。

体力に限界があつて、石鎚スカイラインの終点、土小屋までしか私は登っていないので瓶ヶ森から眼下に展開する雄大な景色を見逃してしまつたものの、それでも、地肌に足を付け、樹肌に触れ得て、霊峰の息吹きを体感したことは欲びであった。山はさまざまナデイスジョンに満ちていた。

志賀直哉の「暗夜行路」に、妻の不貞になやむ主人公謙作が大山の山頂に登り、ふしぎな陶醉に浸る場面が出てくる。「自分を無限の大きさに包んでくれる大自然のふところに溶けこんでいく快感」を味わつた謙作はそのとき妻を許していた。

人間と自然が一体になっていくあの描写は今読み返してみても実に感動的だ。山は人間の迷妄を打ちくだく浄化力を持っているのだらう。「六根清浄」ととなえながら石鎚に登る登山者の気持ちも納め得る。しかし最近では石鎚のその聖域も心ない「観光客」で汚され、ゴミの山だと聞く。

山そのものが神として崇拝され、古くは「日本霊異記」の中にも「石